

人間実現論考

——三島二郎教授心理学講義 (2)——

井 田 政 則^{*1}

A Study of Human Actualization: Psychology Lecture of Professor MISHIMA Jirô II

IDA Masanori

Abstract

In this article, I reviewed the contents of the educational psychology lecture that Professor MISHIMA Jirô examined the human actualization. He took up three case examples; savage children, social isolation children, and humanizing chimpanzee. Based on these substantial documents, he established three principles of developmental psychology that are indispensable for the human actualization. These principles were discussed from viewpoints of educational psychology and educational practice.

[Keywords] human actualization, principles of developmental psychology, savage children, social isolation children, humanizing chimpanzee

序

本論文では、井田（2014）に引き続き、三島二郎（1919-2008）先生の講義を紹介しつつ、先生のいわば「人間学」について論じていきたい。そこで、重複してしまうが、まず前報告で紹介した講義の要約について述べる。ついで、講義内容、講義論考と本論を進めていくことにする。

講義の要約

野生児研究・孤立児研究・孤立ザルの実験的研究・チンパンジーの人間教育研究から知り得たことがらは、要約すると次のようになります。

[野生児]

成熟までのある時期を人間的環境から隔離されて自然（非人間的環境）に放置されると、その後発見され人間的環境においていかに秀れた教育が長期にわたっておこなわれたとしても、一定限度を超えての人間性の実現は終には不可能となります。具体的事例は次のとおりです。

Victor 12歳発見。40歳死亡。発達推定年齢 6歳程度。

Kamala 8歳発見。17歳死亡。発達推定年齢 3歳半くらい。

Amala 2歳前後発見。3歳死亡。回復の希望大。

[孤立児]

Kasper Hauser の如く想像を絶する苛酷な状況下で、しかも発達の可塑的時期を超えて野生児よりも長期にわたって隔離を強制されることにより、発見直後は著しい遅滞を示したが、その人間性回復は速やかで、その実現に支障は生じなかった。かかる事実は実験的孤立児からもある程度の確認がなし得えます。

* 1 立正大学心理学部教授

[孤立ザルの実験]

わずか1か年以内の人為的な孤立状況での成育の結果が、その後の生涯にわたる発達に決定的な影響を与えたのです。

[チンパンジーの人間教育]

人間の子どもとともに秀れた人間環境において人間形成のための養育を数年にわたっておこないました。その結果、言語発達を除いても人間の2歳程度の発達までが限度でした。その素質を超えての発達は全く不可能でした。

講義内容

人間実現についての基本的条件

以上、諸側面からなる研究の資料を総合することによって確認できた人間実現に不可欠な基本的条件は、次の2つです。

1. 正常な人間的素質を継承していること→正常な生物的素質の継承

つまり、発達の可能性。これを継承していないと考えられるのはおそらく1%以下。多くのヒトがこれをもっているといえる。

2. 発達の可塑的時期における人間的環境で過ごすこと→正常な社会的素質の継承

上記の1. を nature 〈素質〉、2. を nurture 〈環境〉といいます。これは一つのことを意味します。人間的素質というのは、人間的環境において主体となる人間が環境からの刺激をみずから選択することによって、開花します。環境あつての素質。この統一的観点なくして“人間”を説くことはできないのであります。

従来の教育研究を省みれば、人間生成に不可欠な nature に関しては、これを全く生物学上の素質の問題として不問にしてきました。上記に述べたように、しかし、人間的素質は、人間環境の中でそれからの刺激を選択することによって初めて人間的素質となっていくのです。教育研究において、この統一的観点を失ってきたことは（心理学者として）許されることではないわけです。つまり、人間の素質とは人間環境を選択する特性に外ならないのであり、したがって、生物学でいわれる素質に対立する（分岐せる）環境という考え方では人間実現は説明ができない。このような事実は、nurture についても言えることであり、教育的環境——教育万能・教育技術・教育愛——のみをいかに重視しても人間の形成が可能となるわけではありません。

人間の実現とは、nature か nurture かの問題ではなく、飽くまで個体を中心とした統一的観点においてのみ初めて可能となることを実証したのが、これらの諸研究——野生児・孤立児・実験的孤立・孤立ザル・チンパンジーの人間教育——であります。

以上の結論にもとづき、これら資料を総合的に再考察してみましょう。それは、次の仮説への解答になります。

仮説：そこにいかに教育の理念・原理の研究、方法・手段についての研究、さらに卓越せる実践的活動があつたとしても、教育の主体者たる人間発達の現実と可能性の研究、すなわち教育的発達研究を欠くならば、それらが期待する人間の実現は不可能となろう。

総合的考察

人間実現を目指す人間教育の基底をなすものは、人間発達の現実と可能性を明らかにすることです。そのためには、人間発達の普遍的原理の追究よりも、逆に発達障害を取りあげて、それへの発達助成を構築することにより、個性的な実践原理を求めていくことが不可欠であると考えます。

以下の考察は、さきの4つの事例から得た結果を総合的に検討することによって得たかかる原理であります。

1. 人間は何よりも生物・物理的存在であること

単なる唯物論が考えている以上の徹底したこの点に対する適確な認識を新たにする必要があります。つまり、人間は社会的存在・精神的存在であるということから出発するのは間違いです。このことをまず野生児を通じて見直してみましょう。

野生児の発見は、古今東西を通じて極めて僅少であるが——Zinng (1942) によると35例;Malson (1972) によれば53

例——、それにしても発見されたことを事実とする限り、人間生命体が本来持っている生命力というのは、常識的に考えられた以上に強靱であり、決して Desmond, M. の言う「裸のサル」でも、また Skinner, B.F. の言うところの「育ちすぎたネズミ」といったものではないということです。

すなわち、野生児の諸例にも見られるがごとく、人間は潜在的には非人間的環境、すなわち自然の中で、単独でも幼児であっても順応し、生存し、発達していく能力を持っている存在である。このような生命力を持っているということを確認する必要があります。すなわち、人間とは、[matter — biolize /acculturate — socialize] という発達のプロセスをとっていく存在であるのです。

しかるにややもすれば、人間を全く社会的・文化的存在であると捉えて、そのことにおいてあらゆる種に優越する存在であると断定してしまいます。そうではなくて、人間のもつ生命力、つまり生物・物理的存在そのものがあらゆる存在に優越する種である、それが人間であることの認識を忘れてはならないのです。すなわち、人間とは、その種を急速に繁殖させ、その結果地球を支配し、また直立も発語も特異な環境支配から創造した存在なのです。人間生命体は、自然を社会化し、文化を創造していった唯一の種なのです。

したがって、古代ギリシャ以来言われてきた「人間は社会的動物である (Aristotélēs)」の意味を「人間は社会なしには、あるいは人間環境にしか、生存できない、ひ弱な存在である」と解したならば、それは全くの誤りということになります。

人間実現をその根本から考えるためには、人間存在に対するかかる正確な認識が不可欠であります。ここに人間に対する正しい認識の出発点があるのです。すなわち人間生命体は、本来的にあらゆる環境に適応し得る無限の可能性をもちます。そのような特異な生物・物理的存在者なのです。その生物・物理的存在性においてあらゆる種に優越していることを基本としているからにはかなりません。この点において人間とは初めから逸脱した種なのであります。ここから人間研究を始める必要があるわけです。

2. 人間は社会・生物的存在であること：bio-social 人間は逸脱せる生物学的存在、すなわち脱生物学的存在

上述した「人間は社会的動物である」という意味を「人間はその発達の可塑的時期を人間的環境で過ごさなければ、人間実現が困難となる存在である」と解するならば、それは間違いのない真理であります。すなわち、あらゆる野生児教育の結果が示しているように、野生児たちは正常な人間の種としての素質を継承していたのにも拘わらず、発達の可塑的時期を非人間的環境に生活していたことにより、生涯かけてもその人間可能性を実現することは甚だ困難であったことです。

かかる事実を発達研究の立場から考察すれば、野生児たちは一個の人間生命体として、その身体の形態・構造・組織においては、何らの障害もなかった筈であります。しかるに成熟に至るある一時期を自然－非人間環境に過ごしたことにより、終に人間としての機能・行動を発達させること、すなわち人間の実現は全く不可能となったことであります。

換言すれば、その身体の諸器官が如何に正常であったとしても人間環境（あるいは社会・文化的環境）としての人間発達の場が欠如したのならば、そこに期待する機能・行動の発達は実現しないことになるわけです。

構造→機能原理（構造が機能を決定するという原理）、これは生物学で言われているのですが、これは誤りであります。この原理は、身体のある器官が成熟さえすれば、自らそこに人間の機能が発現するという一義的な考え方です。

このことを野生児の事例から見てみましょう。(1)野生児 Victor の発声器官には何ら障害や異常はなかった。どんな音でも出せるとされていた。しかし彼は一生言語に障害があった、つまり発語なしの状態にとどまった。発声と発語は関係がない。発声から発語という考え方があるが、これでは人間の言語獲得は解けない。生物学の発想である。生物学は社会を知らない。(2) Victor の嗅覚は鋭敏であった。例えば台所の料理の臭いをかぎ分けて反応をしていた。しかし部屋に自分の排泄物をまき散らしても平気であった。人間的環境にいと、2歳以降、普通の子どもは自己の排泄物を悪臭として知覚していくのである。知覚は獲得される。(3) Victor は音に対する感覚は敏感であった。隣の部屋でクルミをクルミ割り機で押しつぶす音を聞かせるとその音に反応したのにも拘わらず、彼の目の前でピストルを打つ音を聞かせたところ、反応はしなかった。(4)野生児 Kamala においても、同様なことがみられる。Kamala は手足を使つての狼なみの移動速度をもっていたのにも拘わらず、人間としての基本的要件である二本足歩行は、9年間の訓練をもってしても、17歳時点で、幼児以上にはなり得なかった；ヨチヨチ歩きに終始していた。

これらの事実は人間の機能を発現するためには、単なる器官の成熟だけでは不十分であることを意味します。人間の知覚は人間社会で獲得していくものなのです。このことを Riesen (1954) による動物実験の研究結果から見てみましょう；チンパンジー 3 頭を出生時から暗黒環境下で 1 か年間隔離した。このチンパンジーたちの出生時瞳孔反射は正常であったのに拘わらず、生涯失明状態となってしまった。器官の構造には異常はない。夜の暗さ・昼の明るさという物理的環境において、visual perception は形成されていく。器官が正常であっても環境がなければ機能が発現しない。

補足 1

そこで、問題となることは、野生児が発見された時点で未だ成熟せずに残っている器官があれば、それは当然人間環境において人間の機能を発現し得ることになるのではないかとということでもあります。

Victor と Kamala を見てみよう。Victor 12 歳、Kamala 8 歳に発見されたので、ほとんどの器官は成熟をし終えているが、共通して未成熟な器官といえば、生殖器官ということになる。確かにこの二人とも第二性徴がみられ、普通の子どもたちと同じような時期に遅滞なく成熟したと報告されている。しかし、その機能としての性別行動（異性に対する attract 行動；異性に対するのとは異なった行動を示す）は生涯にわたって終に見られなかったということです。性別行動は、人間環境における可塑的時期を経て形成されるものであり、第二性徴があったからといって発現するものではないのです。

ここで、青年心理学の祖あるいは老年心理学の祖と呼ばれる Hall, G.S. の青年期の心理に対する考察を紹介してみよう。彼は自著『Adolescence (青年期) 2 巻本 (1904)』の中で、青年期にみられる行動の極端な動揺の有力な原因として、それは第二性徴の生理的器官の成熟、すなわちその生化学的変化——hormone の交代＝胸腺・松果腺分泌の消失——に注目しています。しかしながら、器官の成熟とその機能あるいは行動の出現との間に発達の必然性はないこと、あくまで行動の発達は、その場としての人間環境（社会）での生活を通じてのみ出現するものであります。それは、幼児期に起こる胸腺異常、また逆に青年期に入っても生殖器官の成熟をみないものもいる。しかし、前者では性別行動は見ないが、後者では性別行動は顕著に認められる。

以上の諸事実から、野生児においては、行動の基本たる知覚・運動面の発達が、人間としては全く不完全であったことから、それらのさらなる分化としてのあらゆる行動——知的・情動的・社会的——の発達は当然ながら著しく遅滞していたことにより、これらの全体的統合の主体者、すなわち personality formation—人間の実現—は全く絶望となったことになります。

補足 2

上記した事実に対して、逆に発達の可塑的時期を人間環境で生存し成熟した後において野生に放置されたらどうなるのか、考えられることは次のとおりです；この場合如何に長期にわたって自然・非人間環境に放置されたとしても一旦獲得した人間性を喪失することはあり得ないだろう。つまり、一旦成熟した後、野生児になったとしてもそこでは大した問題は生じないということです。このことは諸事実からみて裏付けられます。

事例：1978 年 1 月 7 日 Jakarta 発 AFP 時事通信によると Indonesia の Sumatra の密林地帯で 14 年間も他の動物と一緒に暮らしていたジャングル少女が発見されました。この少女は収容されてから間もなく言葉を思い出して、この期間のジャングルでの生活体験を語ったということです。この少女は Sumatra のビュートンという村に住んでいたルスダーさんで、13 歳の時に野生に逃れ、発見されたのは 27 歳でした。砂糖黍刈り中の二人の農夫によって 1 か月前に救出、発見された。何故ジャングルに入ってしまったかという、農家の娘であった彼女は 13 歳の時に結婚することになり、その時には両親も賛成をしたが、結納をかわした時男からの持参金があまりに貧しかったので、父親が結婚を破談としたとのことです。娘が逃げ出すのを恐れた父親は彼女を部屋に監禁したのですが、姉に同情した妹が彼女を逃がしてやりました。捕まると父親に殺されると思ったルスダーは、そのまま村の北方の人跡未踏のジャングルに逃げ込んでしまったということです。27 歳に発見当時、はじめは言葉が使えず、真裸で人間か否か見分けることすら困難であったということです。救出後は叔父の家に引き取られているが、最近では自分と一緒にいた動物たちについて語り、動物たちはいっこうに怖くはなかったと述べています。その後 6 か月で普通の生活に戻ってしまったということです。

補足 3

これら事実と関連して考えておかねばならないことは、この文明社会に生まれ育って成熟したものの中に精神の異常をきたし、人間の崩壊を起こすものがあるという事実であります。これはこの社会の中に野生に等しい世界があり、彼らはその中におそらく孤立してきた結果によると考えざるを得ません。つまり、彼らにとっては不毛な人間関係の世界は野生に等しいものであったに違いないということです。あるいはまた社会の中に格子なき牢獄に拘禁されたものといえましょう。換言すれば、われわれが文明とよんでいるこの社会の中に野生あるいは荒廃した人間関係の世界が潜んでいること、彼らはそこに孤立・隔離されてきたことを教えていると思います。

あらゆる発達障害は、その意味において“Isolation syndrome”と称することができます。精神の異常はその社会に起こる故に、孤立児がモデルとなるのではないのでしょうか。

以上を通じて、殆どの人間は、社会に生まれ育っていくことから、この人間環境の持つ働きに無知となり、人間の実現はただ健全な素質を継承すること、その自然展開だということ、そういった誤解も生じてきました；教育とは逆の生物主義。

しかし、事実は逆で、素質に選択の範囲を与え、またそれを発現させ人間の行動たらしめるものは、実に人間環境に外ならないことを忘れてはなりません。ことそれほどに、人間は社会・生物的存在であることにおいて、他の種と比較することのできない逸脱した種なのです。

3. 人間は唯一の教育的存在である

（したがってまた価値的個性的存在たり得る—自己実現）

孤立児が生育されてきた発達の場合は、野生でも自然（非人間環境）でもなく、つねに人間環境、文明社会でありました。しかし、発見時はいずれも野生児と間違われてきたほどの著しい発達遅滞を示しています。このことから拘禁という孤立条件が、如何に人間発達を阻害する力を、それに障害をもたす力をもつかは明らかです。孤立児が発見された時の所見はつねに「人間というより動物に近い、言葉は話すことも了解することもできない、それどころか歩くこともおぼつかない、全くの最重度の精神遅滞の状態である。」孤立児は野生児よりも長期にしかも可塑的時期を含めて拘禁されてきました。

このような孤立児が発見され拘禁から解放されて普通の社会生活に復帰するや、いずれの孤立児も急速にその著しい発達遅滞を解消して順調に人間性を回復していく点において野生児とは全く異なるということであります。社会によって人間になる＝教育的存在であります。

この事実は、苛酷な孤立条件——それは地理的・物理的制限と社会的・文化的条件制約——が、生涯かけての人間実現に決定的な障害とはなっていないこと、人間環境内での孤立条件であることにより、解放という孤立条件の解消とともに教育の効果は全的に有効となることを立証してるわけなのです。

補足 1

そこで問題となってくることは、孤立児においては何故にこのように早急に人間性の回復が可能となるのか、すなわち孤立児たちは何歳で救出されようと大体2か年位で同一年齢水準への回復ができるのはどうしてかの問題でしょう。つまり、人間性回復のための教育によって、きわめて短期間で人間性を回復し得たということは、驚きに値します。では、野生児においてはほとんど絶望的であったことが、孤立児では何故に可能であったのであろうか。この場合、考えられることは、あの苛酷かつ劣悪な隔離状況というものが、要するに人為的条件——例えば、誰が食べ物をあたえたのか？ 排泄物は処理されていたのか？ などなど——にはほかならないということです。苛酷な人為的条件にせよそれはやはり一つの人間的環境なのです。そのように考えないと発達のもっとも可塑的な時期を長期にわたって隔離されたのにもかかわらず、後の人間性回復の学習が阻害されなかったことの説明ができません。これを立証し得る資料はないのでしょうか。動物の学習実験において次のような成果があります。

[潜在学習 (latent learning)]

認知学習理論家 Tolman, E.C. の指導のもと Blodgett, H.C. がおこなった潜在学習実験を検討してみましょう (Blodgett, 1929; Tolman, 1948; Tolman & Honzik, 1930)。

潜在学習実験はもともと学習には強化が必要なのであろうかという問題に答えるためにおこなわれた研究である。実験の一例を具体的にみてみよう。図1に示した複雑な迷路を用いて、次の3条件でネズミを17日間訓練した。第1群：HNR群は目標箱に到達しても、餌が与えられなかった。単に迷路から取り出されただけであった（餌の報酬なし群）。第2群：HR群のネズミは、すべての試行において目標箱で食餌強化子が与えられた（常に報酬あり群）。第3群：HNR-R群では、条件は11日目に切り替えられた。はじめの10日間は目標箱に餌が無かったが、11日～17日では食餌が導入された（10日まで餌の報酬なし群）。図2のグラフは出発箱から目標箱に到達するまでの平均誤数（袋小路に入ったエラー数）を3群別に表したものである。第2群の常に強化されたネズミは典型的な学習曲線を示し、実験終了までに誤反応

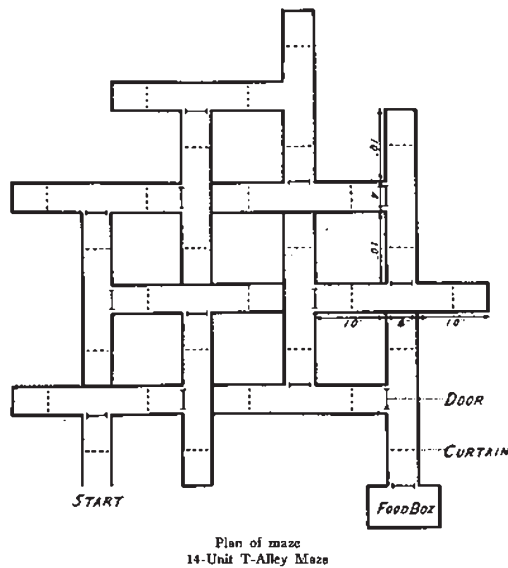


図1 潜在学習実験装置・迷路

(From M.H. Elliott (1928). The effect of change of reward on the maze performance of rats. *University of California Publications in Psychology*, 4, p.20.)

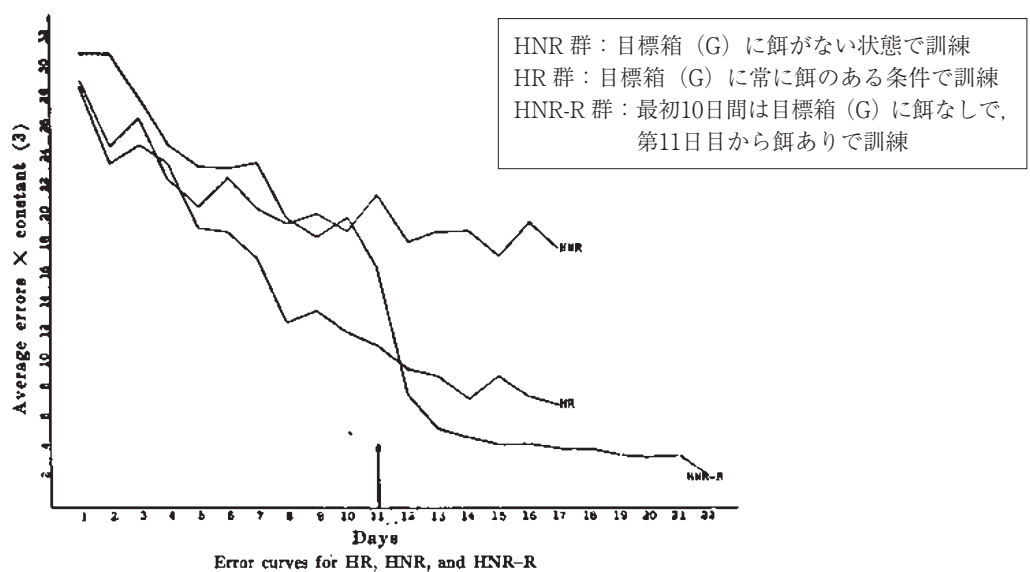


図2 潜在学習・実験結果

(From E. C. Tolman & C. H. Honzik (1930). Introduction and removal of reward, and maze performance in rats. *University of California Publications in Psychology*, 4, p.267.)

数は約3回まで減少した。第1群の強化されなかったネズミたちは実験の全セッションを通じて、成績が悪かった。第3群は興味深い結果を示す。最初の11日間の結果は、第1群のそれとほぼ同じで成績が悪い。しかしながら、12日目につまりたった1日間の強化を経験しただけで第3群の遂行行動は劇的に向上した。その後の実験では第3群の平均誤数は、第2群の平均値よりわずかに低い値を示した。言い換えると、目標箱で餌が与えられるやいなや、その遂行行動ははじめから強化されてきたネズミたちの遂行行動と等しくなってしまったのである。この事実は、目標箱に餌がない10日間に迷路の空間的配置についての学習—認知地図の形成がネズミたちに潜在的に起こっていたことを示す。

すなわち、孤立児においては、おかれた環境がいかに劣悪な状況であったにせよ、人間環境の一つであったが故に人間実現への「潜在学習」が行われていたのではないのでしょうか。

確かに孤立児の拘禁時の環境は、知覚・運動発達の制約と家族的・社会的隔離という全く非人道的な状況であり、それが長期にわたったことにより著しい発達の遅滞と人間性の荒廃が進行したことは当然と言えます。しかし、野生児が非人間環境としての自然に放置されたのは異なって、それは紛れもなく一つの人間環境であったことです。したがってなお、潜在的には人間実現の方向以外の働きかけは皆無であったことから、それに canalization, imprinting されていたのではないのでしょうか。そのように考えないとわずか2か年位で、これほどの急速な回復が可能であったことの説明がつかないことになります。

ここで、言うところの canalization と imprinting は次のような意味であります。

Canalization : 「水路づけ」と訳される。Janet, P.M.F. → Murphy, G. (1947)

ある衝動を満足させる種々なる手段に対する差別的反応による漸次的な推移

Imprinting : 「刷り込み」 Lorenz, K. オーストリアの動物行動学者。ハイイロガンの観察研究。

- 1) 生後間もない時期に知覚したものが、後の学習に強い影響をあたえること。この場合最初の知覚が遺伝によるか、学習かは不明。
- 2) 生後間もない時期に身につけた習性が、その後も変わらず別の新しい習性を身につけることを妨げること。
- 3) 生後間もない時期での社会的接触によって成立したものが、成熟した後の社会的行動の様式を決定すること。

以上の傍証的な事実を通じて、孤立児の人間性の回復ぶりをみていくと、確かにその発達の可塑的時期を含んで孤立状況にあったとしても、それは人間環境内での孤立状況であったことから、それが如何に苛酷なものであっても、原型的には人間実現の方向への働きかけが潜在していたとみられます。したがって一旦解放されるとかかる原型的な働きかけが核となって爆発的な人間回復が始動されるものと思われます。

さらに付加すると、人間の身体の形態・構造・組織の発達には、人間環境からの刺激を得ると殆ど自動的に機能し易い素因を遺伝的に継承していると考えられる——これを素質と呼びます。したがって、その人間環境が著しく貧弱であっても、そこには人間の機能を発現する素因が蓄積されていくことになりましょう。それが起爆剤となって解放後の急速な人間行動の発動と進歩が起こされるのではないのでしょうか。

補足2

それでは、どうしてそれが野生児では困難となるのか、これについて考えていきましょう。野生児も社会に生まれたものであるが、発達の可塑的時期において人間環境からの働きかけを欠いた故に、人間の機能・行動習慣を全く身につける機会を保たなかった。すなわち野生児は、種として内的に継承してきた身体の形態・構造・組織に都合のよい自然(系統)発生的な行動——unlearned reaction——を発現する機会(人間環境の刺激)を殆ど与えられず、逆に野生に順応するための行動獲得を canalization, imprinting され続けたことにより、終には救出後に如何に人間行動習慣に変えようとしても、それは甚だ困難となったというわけであります。既に野生児は自由に自然適応を身につけてしまったのです。

換言すれば、自然にいた時の野生児は、生きていくためには能動的・積極的・自覚的に自然に適応してゆかねばならない、これに対して孤立児は、自由な運動すら制限された隔離状況に否応なしに受動的・依存的な適応をする外はありません。しかし、その生活の場は紛れもない人間環境であったが故に——消極的・受動的な適応に限定されたことから著しい遅滞は生じたとしても——、それは明らかに人間行動習慣のパターンを(原初的なものに限られていたとしても)身につけていったことにおいて野生児とは全く異なることになります。

すなわち、野生児では人間実現を可能とする自己形成——これは人間環境においてのみ生成されるもの——が、野生に入るとともに失われ、ひたすら自然への積極的適応による野生習慣のみが形成されていきました。したがって、救出後の教育とは、これへの消去→人間環境での新行動の獲得という複雑にして困難な状況におかれたことになります。その結果、人間実現は一定限度を超えては絶望となったわけであります。

以上の推論の正しさはある程度まで立証してくれる研究結果が、「実験孤立ザル」であります。これは、サルを人間環境の中に物理的に拘禁した研究です。この拘禁により、サル達は遂に猿的環境にすら適応が不可能となったのです。

講義論考

以上が三島先生による「人間実現をめぐる」講義の内容である。

本論文は、前報告（井田、2014）と同様に三島先生による1974年度講義「教育心理学原論」のノートおよび1982年度「教育心理学原論」のノート・録音テープを、さらにそれら付け加えて1988年度早稲田大学大学院（文学研究科心理学専攻・修士課程）の講義ノートをもとにしている。本稿執筆に際し、これらノートを熟読し、三島先生が講義のなかで紹介なさった関連文献を収集し、かつこれらにも当たりつつ、講義内容を起こした。また、ノートだけでは不明な点や理解ができない箇所があり、それらについては録音テープを何度も聴き直した。このようにして本論文を執筆していったわけであるが、その執筆過程で何度も躊躇したことがある。それは、「野生児」についてである。とくに、Gesell (1941) によって紹介されたいわゆる狼に育てられた子・Kamala と Amala に関する記載である。現在に至るまで、この野生児の存在の真偽については問題となってきた。

この野生児たちはその存在についてこれまでどのように考えられてきたのであろうか。文献を渉猟してみよう。人類学者 Zingg (1942) は野生児 Kamala と Amala の存在については信憑性があるとし、また、Malson (1972) もその存在は真実としている。また、1975年に Kamala と Amala の記録に関してイギリス人による現地調査がおこなわれた。その調査結果を取りまとめた Maclean (1977) は、話に誇張や思い違いがあるが、話自体は真実なものと言えようとしている。一方、精神分析医であり自閉症児の研究・教育をおこなった Bettelheim (1959) は、この二人の野生児は、遺棄された重い自閉症児であると考えている。藤永 (1982) も野生児は一種の文化的フィクションであるとしている。藤永はまた、人間の初期環境が人間発達におよぼす影響について詳細に論じた文献の中では、野生児の事例は取りあげていない（藤永・斎賀・春日・内田、1987）。さらに、狼少女・Kamala と Amala の記録は「99.9%までフィクションだと信じている」としている（藤永、1995）。福田 (2007) は、この言明に対して、“しかし100%とは言っておりません。筆者が違和感をおぼえたのは、Singh, J.A.L. が当時のピンぼけの写真や、状況写真を含めて、これでもかこれでもかというように提出してくること、あまりにも詳細な日記の記述でした。” (p.207) と述べている。鈴木 (2008) は、シング牧師による日記と写真資料 (Singh & Zingg, 1942) を分析・検討した結果、写真および日記の不審点・矛盾点を指摘し、写真には作為があり記述は捏造であると述べている。すなわち、オオカミ少女の話は脚色されたものだとし、Kamala と Amala の二人の女の子は森に遺棄され、何とか生き延び、その後、シング牧師の孤児院に収容されたのであり、オオカミに育てられたのではないとしている。

ここで、話は脇道にそれるが、いわゆる野生児の事例について三島先生の講義内容および関連資料をみてみよう。福田 (2007) は次のように述べている：“1975年の夏、セイロンのスリランカで、Tisa (♂) という名の野生児発見という報がはいりました。入手した写真や、8ミリフィルムを検討してみますと、明らかに臍が細く、井戸端に寄りかかるようにして、水をかけられて苦笑いしているような、はにかんでいるような姿があります。かなりの確率で、野生児であろうということで、三島先生と渡航しようということになりました。当時大正大学へ赴任したばかりの身でしたが、浅草寺の五重塔の仏舎利は、セイロンからの分骨であるということから、塩入亮達先生にお願いして、セイロンの有力者をご紹介いただきました。現地へ行く段取りをしていた矢先、先方から「来ても無駄足になる」という電話が入りました。つまりこの少年を発見したトリマーチ・イカヤナークという老婆が、この少年を拾得物として保護し、見せ物として全国を回りはじめたということでした。この種の人権を保護する法律がまだ整備されていないということでした。ここに野生児の実見を、断念せざるを得ませんでした。” (p.207 原文のママ。)

三島先生は、ここで記されている Tissa という少年を1974年度・1982年度講義「教育心理学原論」で野生児の一例としてとりあげている。この講義内容について、市川 (1976) の報告も参考にしながら紹介していこう。

[野生児 Tissa (ティサ)]

スリランカ (Sri Lanka) で発見された野生児 Tissa (男の子) についてみてみましょう。1967年彼はスリランカ東南部のカタラガマ (kataragama) のティサ川のほとりで、老婆プリマワチ・エカヤナケ (Premawathi Ekanayake; 62歳) によって発見されました。発見場所にちなんで、「ティサ」と命名されています。その後6年間その老婆のもとで養育され、他の人の目には余り触れなかったようです。

1973年、首都コロomboの一新聞記者により、その存在が公となり、1974年にコロomboの福祉センターで育てられることになったものです。1974年現在で、推定年齢12歳、身長120cm、立つことも歩くことも完全ではない。歯は鋭く反っ歯で、太ももが大きく、ふくらはぎが細いといった野生児の特徴が見られます。

Sri Lanka week end (週刊誌) には、要約すると次のような報告がなされています。

発見当時推定年齢6歳の男の子。名前は Tissa。僻地で人知れず6年にわたり、老婆により養育。

老婆の証言：

カタラガマの川岸で水を飲んでいる、しっぽのない山犬のようなものを発見。(この地にはジャッカルが棲息。)

口が異様につきでている。反っ歯。歯は鋭い。

太ももが太い。ふくらはぎが細い。四つん這いで歩くことができる。

移動は四つ足のみ。歩行ができない。直立はものに寄りかからないとできない。

手のひらはかたい。いつも握っている。

食べ物生肉を食する。グランドマナー。

握力はまったくなし。棒を20秒も握ってられない。

人の声はまったく出ない。山犬 (ジャッカルのような) 吠え声をたてる。

当初、着物はきない。

昼間はほとんど行動をしない。夜になると行動をおこす。

火をおこそうとすると逃げる。火をきわめて恐れる。

また、1973年に人類学者ギルヴァンが診断しています。Sri Lanka week end の依頼で診断したとのこと。

ギルヴァンの証言：

年齢推定で12歳。身長120cm 体重45kg。

つかまり立ちができる。歩くことはできない。歩かせようとしても倒れる。移動は四つ足。

腹ばいになるか、両足を投げ出してすわる。

裸で着物はきない。

ココナッツ・パパイヤ等果物を食するようになる。人間が食べる現地食 (カレー煮の食事) を与えても食べない。

水は舌でなめるように飲む。

今でも夜起き、昼間は日陰でうずくまって寝ている。

悲しみやさびしさの表情はない。ひもじいときに食べ物を与えると、口をにっこりと笑う、これが唯一の表情。

坐位ができない。椅子を与えても膝をだいてこれに座る。(これはカマラと同じです。)

老婆が、6年間、朝顔を洗う習慣をつけさせようとしたが、ダメであったようです。ただ水を飲むだけとのこと、老婆が顔を洗うまねをして、教えようとしたが、やらないとのこと。6年の習慣づけの結果、両手を洗面器の水につけるといことはするようになったようです。

その後、報道により、野生児がいるということが世界中に配信されました。Tissa はコロomboに呼ばれ、福祉センターに入所します。

私 (三島先生のこと) は、その生態から野生児であろうと判断し、コロomboを訪問し会いに行くことを計画しました。しかし、その一年後渡航をする前に、連絡がはいり、福祉センターにはもういないことが明らかになります。その後分かったことを述べますと、1974年にティサの養母プリマワチ・エカヤナケが訪ねてきて (戸籍のようなものを持って)、この少年を引き取ったそうです。その後行方知れずとなり、祭りなどで鎖につながれて見せ物にされていたという報告があります。

以上が少年 Tissa に関わる講義の趣旨である。なお先生は、Tissa の行動や生態ならびに彼のおかれた環境が記録されている 8 ミリフィルムを入手なさり、授業では、講義への理解を深めるために、それを上映なさっていた⁽¹⁾。

その後筆者が調べたところによると、この少年 Tissa については、三重大学に在職なされていた市川先生が、「野生児 ティサー (the Wild Boy “Tissa”)」の論題のもとに一連の報告をしている (市川, 1976, 1977, 1978, 1979)。とくに市川 (1976) では、Tissa の精神発達の状態を診断するために実施された発達検査の測定結果が報告されている。ちなみにこの論文の中に掲載されている写真のうちその 1 枚は、上記の三島先生が入手した 8 ミリフィルムの一場面と同じものである。

ここで紹介した Tissa は野生児と言えるのだろうか。私には、Tissa が撮影されている 8 ミリフィルム映像をみても、市川の一連の報告資料を検討してみても、Tissa 少年が野生児であるかどうか、その真偽は判定できないように思われる。野生児が、例えば、森の中において一人で自活しているところを、あるいはオオカミと一緒に生活しているところを、第三者が客観的に観察したわけではない。また、第三者が観察し、記録し、報告してきた野生児はこれまでにいない (長期間にわたって第三者がその「野生児」を「観察し続ける」としたら、それはもはや野生児とは呼べないのではないか)。このように、記録の信憑性を含めて、野生児の判定にはさまざまな困難がある。

藤永 (1995) の “[オオカミ少女談義の] 真偽のほどは、もはや時の流れに沈み去り確かめようもない” (p.165) という主張は、そのとおりだと思う。時の流れのなかに真偽を決める証拠は埋没してしまっているのである。今となっては、その真偽を確かめようがないのだ。

本稿においては、野生児に関し上記のような問題があることを認識しつつ、あえて野生児の事例をバックボーンとする三島先生の講義内容について述べてきた。その理由は次のとおりである。

第一の理由は、前稿 (井田, 2014) において論文執筆の目的として述べたように、本稿でも、三島先生の思索の過程・軌跡を明らかにしようとしたからである。三島先生が、心理学の、就中発達心理学の原理をどのようにして生み出していったのかを説き明かすことを試みたかったからである。人間発達における初期環境の重要性を論じるときに、多くの研究において事例として取りあげられてきたのは、野生児と孤立児 (社会的隔離児) の 2 事例である。三島先生は、この 2 事例に加えて、チンパンジーの人間教育の事例を、さらに補足事例として、実験的孤立児・孤立ザルの研究を考察の対象として、これら諸事例から発達の原理を導き出している。野生児・孤立児・チンパンジーの人間教育これら 3 事例は、素質・環境・経歴という条件を一部ずつ共有していることにより、資料を比較検討し、総合できることになる。野生児は特定の人種的・家族的な素質を継承していることにおいて普通の子どもと変わりはないが、人間としての個性を決定づける社会的・文化的環境を欠いている。孤立児は発見当時の生態から野生児と殆ど変わりがなかったことから、その社会的隔離が想像を絶する苛酷な条件であったことが考えられる。しかしながら、その隔離が人為的環境であった点、野生児とは全く異なる存在であった。チンパンジーの人間教育とは、人間的素質の継承を全く欠いた野生のチンパンジーを人間の子どもと一緒に育てることにより、どれだけ人間になり得るかを示したものである。これらを表 1 にまとめた。このように性質の異なる事例を緻密に総合考察することにより、原理を導きだし、その提言をおこなっている。このように先生の思索のプロセスとその成果には独創性と卓越性が感じられる。

表 1 3 事例 (および補足事例) の素質・環境・経歴

	野生児	孤立児 (実験的孤立児を含む)	チンパンジーの人間教育	補足事例：孤立ザル*
素質	人間素質	人間素質	野生	野生
環境	非人間的環境：野生	人間環境	人間環境	非サルの環境：人為的環境
経歴	人間教育なし	人間教育なし	人間教育	サルとしての養育なし

*野生児と対応する

第二に、上述したように野生児の事例に真偽の疑いがあることは確かだが、過去の心理学あるいは教育学研究において、野生児研究がどのように扱われ、どのように考えられてきたのかを記しておきたいとの思いからである。野生児研究を紹介するのにこの研究領域の第一人者である三島先生の講義内容を明らかにしておくことは、歴史的意義があるのではないだろうか考えたからだ。ただ、事例として取りあげた野生児について、現在の心理学研究からすると問題が

あるのならば、今後、ここで紹介してきた原理については見直していく必要があろう。ただ、本稿で述べた三島原理と言うべきものはどれもその内容は卓越したものであり、個人的には、古色蒼然としたものにはみえない。現在の心理学的観点からもその存在意義が感じられる。したがって、今後は、科学の客観性・公共性をふまえると、真偽について問題がある野生児の事例には触れずに、これら原理の検討をおこなっていくことが肝要であろう。それには、現代心理学の関連領域からの、例えば行動遺伝学・比較行動学・比較認知科学・比較認知発達科学などからの研究成果が役立ち、その成果から示唆を得ることがあるのではないだろうか。これは将来における課題である。

心理学が人間の行動——精神を含む——の解明を目指していることに異論はないであろう。筆者がこの解明に向けての心理学研究をおこなっていく際に、三島先生の講義内容から影響を受けた二つの点について、最後に触れておきたい。本稿でも紹介したが、三島先生は、有機体を常に形態－構造－機能－行動という観点から捉えようとなさっていた。そして、講義でも日常の談義でも、心理学研究はこの最後の「行動」を見なくてはならないと繰り返し述べておられた；「機能」のレベルであってはならないと。この形態－構造－機能－行動というレベルと分類は、筆者が人間の心理を考える際に、今振り返ってみると、常に示唆に富み役立つものであった。もう一点は、これも先生が再三再四唱えておられた社会・生物学的（bio-social）な観点である。筆者は、卒業論文・修士論文研究では、動物を被験体とした実験をおこない、学習理論について検討をした。このような心理学的生い立ちをもつ筆者にとって、この社会・生物学的観点もまた有機体の行動を考える上で示唆あふれるものであった；どちらが欠けても人間研究にはならないと。この社会・生物学的観点については、本稿では与えられた紙数に限りがあり、ここで論じきれものではない。そこで、これについての論考は次稿に委ねたい。

また、三島先生は、野生児・孤立児・チンパンジーの人間教育の諸事例についての分析・検討・考察を踏まえて、本論で紹介した発達の諸原理以外に、(1)自然とは、社会あるいは文明とは何か、(2)いわゆる障害児教育への教訓、(3)学校教育の限界、(4)教育発達の心理学的研究の意義について、詳細に論じている。これらについても、今後、稿を新たに起こしたい。

註

- (1) この8ミリフィルムは、私の記憶では確か、早稲田大学教育学部教育学科教育心理学専修の卒業生・伊澤正雄氏が設立した「野方製作所」（記憶間違い・記憶変容がなければ）において編集がなされ、オープニングタイトルやクレジットが付けられ、さらに音楽も挿入され、ドキュメント映画のような装いが施されて、それが授業時に上映されていた。私が助手の時代に、この上映操作をしたこともあり、このようなことを覚えている。その後、三島先生から、この編集された8ミリフィルムをお借りし、新宿ヨドバシカメラに持ち込み VHS カセットテープへのダビングを依頼したが、「野方製作所」のクレジットがあったために著作権者の許可がなければ、複製はできないと言われ、ダビングを断念した、そのような記憶がある。三島先生がご退職前に、この編集版8ミリフィルムを再度お借りしようと先生を訪ねたが、フィルムの所在が分からないとのことであった。ただ、幸いにして編集をする前の8ミリフィルムの原板があったので、それをお借りし、VHS カセットテープに複製をした（原板にはクレジットが無かったために問題なく複製が可能であった）。筆者は、それをパーソナル＝コンピュータでも見られるよう PC 用の動画に変換し、現在それを所有している。
- (2) 三島先生は授業や談義において、日本語では「社会・生物」という語順で、英語では「bio-social」と逆の語順で講じておられた（この点講義ノートでも確認をした）。この理由について、先生はとくに述べられてはいなかったと記憶している。ただ、「社会生物学（sociobiology）」（eg., Wilson, 1975）が台頭してきたときには、これを批判しつつ、自らの社会・生物学的観点について論じておられた。これらの点に関しても、今後、講義ノートを紐解き、検討・考察をしていきたいと考えている。

文 献

Bettelheim, B. (1959). Feral children and autistic children. *American Journal of Sociology*, 64, 455-467.

（ベッテルハイム，B. 石橋由美訳（1978）. 野生児と自閉症児 中野善達（編訳）野生児と自閉症児一狼っ子たちを追って 福村出版 pp.27-62.）

- Blodgett, H. C. (1929). The effect of the introduction of reward upon the maze performance of rats. *University of California Publications in Psychology*, 4, 113-134.
- Elliott, M.H. (1928). The effect of change of reward on the maze performance of rats. *University of California Publications in Psychology*, 4, 19-30.
- 藤永 保 (1982). 発達心理学 岩波書店
- 藤永 保 (1995). 発達環境学へのいざない 新曜社
- 藤永 保・斎賀久敬・春日喬・内田伸子 (1987). 人間発達と初期環境—初期環境の貧困に基づく発達遅滞児の長期追跡研究— 有斐閣
- 福田典雍 (2007). 野生児研究—三島教授心理学談義Ⅲ— 大正大學研究紀要 人間學部・文學部, 92, 207-224.
- Gesell, A. (1941). *Wolf child and human child*. Oxford, England: Harper.
- (ゲゼル, A. 生月雅子訳 (1967). 狼に育てられた子 家政教育社)
- Hall, G. S. (1904). *Adolescence: Its psychology and its relations to physiology, anthropology, sociology, sex, crime, religion, and education*. Vols. I and II. New York: D. Appleton & Company.
- 市川千秋 (1976). スリランカの野生児—ティサーに関する資料 三重大学教育学部研究紀要, 27, 239-243.
- 市川千秋 (1977). 野生児: ティサーに関する資料 (Ⅱ) 三重大学教育学部研究紀要. 教育科学, 28, 63-65. (英文)
- 市川千秋 (1978). 野生児: ティサーに関する資料 (Ⅲ) 三重大学教育学部研究紀要. 教育科学, 29, 65-69. (英文)
- 市川千秋 (1979). 野生児: ティサーに関する資料 (Ⅳ) 三重大学教育学部研究紀要. 教育科学, 30, 45-50. (英文)
- 井田政則 (2014). 人間実現をめぐる—三島二郎教授心理学講義 (1) — 立正大学心理学研究年報, 5, 1-10.
- Maclean, C. (1977). *The wolf children*. London: Allen Lane.
- (マクリーン, C. 中野善達訳編 (1984). ウルフ・チャイルド—カマラとアマラの物語 福村出版)
- Malson, L. (1972). *Wolf children and the problem of human nature*. New York: Monthly Review Press.
- (マルソン, L. 中野善達・南直樹訳 (1977). 野生児—その神話と真実 福村出版)
- Murphy, G. (1947). *Personality: A biosocial approach to origins and structure*. New York: Harper & Brothers.
- Riesen, A. H. (1954). Vision. *Annual Review of Psychology*, 5, 57-88.
- Singh, J. A. L., & Zingg, R.M. (1942). *Wolf children and feral man*. New York: Harper & Brothers.
- (シング, J.A.L. 中野善達・清水知子訳 (1977). 狼に育てられた子—カマラとアマラの養育日記 福村出版)
- 鈴木光太郎 (2008). オオカミ少女はいなかった—心理学の神話をめぐる冒険 新曜社
- Tolman, E. C. (1948). Cognitive maps in rats and men. *Psychological Review*, 55, 189-208.
- Tolman, E. C., & Honzik, C. H. (1930). Introduction and removal of reward, and maze performance in rats. *University of California Publications in Psychology*, 4, 257-275.
- Wilson, E.O. (1975). *Sociobiology: The new synthesis*. Cambridge: Belknap/Harvard University Press.
- Zingg, R.M. (1942). Feral man and cases of extreme isolation of individuals. In J.A. L. Singh & R.M. Zingg, *Wolf children and feral man*. New York: Harper & Brothers. pp.131-365. (ジング, R.M. 中野善達・福田廣訳 (1978). 野生児の世界—35例の検討 福村出版)